

アメリカ科で学んだことで我が人生は・・・

第6期（1958年卒業） 高橋 照美

齢80を数えるに至って我が人生を顧みるとき、いつも何かの出会いがあって、それがその後の私の人生に1本の糸となって繋がり、そのような糸が幾つも織り重なってその後の私の人生を形作ってきたという感じである。何か、決定的に大きな出来事があって、それが大きく私の人生を変えたという訳ではないが、アメリカ科で過ごした2年半が、その後の私の人生に少なからず影響を与えたことは間違いないと思う。

なぜ、教養学科を、そしてアメリカ科を？

昭和30年の夏、教養課程を終えて専門課程への進路を選ぶにあたって考えた**とき**に、戦後に新しく設立された教養学部教養学科の英語名に“Liberal Arts & Sciences”とあることに大きな興味を覚え、あまり内容も分からずに、ここに行こうと決めたように思う。

それでは、その中で何故アメリカ科を選んだのか？ それは、単純に私は外国人といえどアメリカ人しか知らなかったからである。

戦後いち早く私の住む北海道の新得という町にアメリカ軍が進駐してきた。当時まだ私は小学生であったが、物珍しさに、町の小さな旅館に駐留していたアメリカ軍兵士の所に押しかけて、英語など分かる筈もなく日本語で話しかけたものである。その度胸が気に入ったのか、チョコレートくれたのである。アメリカ人とチョコレートとの最初の出会いであった。

中学生になって、深川という町に住んでいたが、ある教師の勧めで、アメリカ人牧師が開いていた「Bible Class」に出席するようになった。**ここでも**、英語を話せる訳ではなかったが、何となく外国人と接するのが楽しくて通ったものである。教養学科の地域研究科の中では、アメリカ科しか頭になかったのかもしれない。

アメリカ科を選んだもう一つの理由は、アメリカ科の卒業生が非常に多岐にわたって社会に出ているということであった。卒業後は就職することを前提にしていたので、いろいろな分野に先輩がいるというのは大きな魅力であった。今でこそ、就職先に関する情報は、インターネットで瞬時に入手できるが、当時は、**伝受**を頼って会社を訪問し、情報を得るのが最も有効な方法であった。アメリカ科の卒業生の中には、官庁や一流企業に就職している先輩が大勢いるので、そうした先輩を頼ることができると思ったことであった。

また、アメリカ科の主任の中屋健**式**教授は、学生の面倒見がよく、就職の世話をよくしてくれるという話を聞いたこともアメリカ科に決める要因になったと思う。

なぜ、就職先として住友商事が？

大学4年になってそろそろ就職活動を始めようと考えていた矢先、住友商事という会社の説明会が駒場で行われることを知った。この会社がどういう会社なのか全く知らなかったが、世界各国に事務所や駐在員を置いて、貿易を中心とした商事活動をしている会社と知り、会社の説明会に出席をした。そして、中屋先生にその話をしたところ、即座に、「もし、君がその会社を受けたいのであれば、宇野君を紹介してあげるよ。宇野君とは、成蹊で一緒だったのでよく知っているから」といわれた。その宇野君とは、当時、住友商事東京支社の総務部長を務めておられた宇野信夫さんで、人事・採用の責任者であった。私は、早速、中屋先生の紹介状を持って宇野部長を訪ねることになったのである。

入社試験は、各学校単位で行われ、東京大学からは21名が受験したが、14名採用、内、教養学科からは私を含めて6名が採用された。実は、就職活動にあたっては、他の会社も考えていたのであるが、住友商事から意外に早く内定の通知が来て、この会社に入ることを決めてしまっていた。11月には、入社前にも拘わらず豊島園で行われた会社の運動会に招待され、「樽転がし競争」に出場して1等賞の賞品を頂戴したりしたものである。

なぜ、化学品部門に配属？

昭和33年4月、103名の新入社員が大阪の住友商事の本社に集まり社員研修を受けた。1ヶ月の研修が終わって、各自の配属先を決めるにあたり面接が行われたが、その時「学生時代に好きな学科は何でしたか？」と尋ねられ、私は「化学です」と答えたのである。そう答えたことが、私の配属先を決める決め手となり、その後の職業人生、そして私の人生そのものを大きく左右することとなったように思うのである。

住友商事は、住友グループに属する商事会社であるが、グループの中には、住友化学や住友金属鉱山などの会社があり、化学品は、取扱商品として重要であった。文科系の学部出身者で、「化学」を好きな学科とする学生は珍しく、人事当局は、すぐに私の配属先を化学品部門と決めたようである。昭和33年4月「本店肥糧化成品部化成品課勤務を命ずる」という辞令であった。

なぜ、「化学」が好きな学科となったのか？それは、高校に入学したときの担任の先生が、「化学」の先生であったこと、そして、化学という教科が、それまで中学校で学んだこととは全く次元の異なる分子・原子の領域に係わり、物質を構成する元素とか、元素の結合による化学反応などについて学ぶことに興味を持ったからである。

会社生活と化学品

その後の私の会社生活は、化学品とは切っても切れないものとなった。昭和37年6月私はミラノ事務所勤務を命じられた。住友化学がイタリアのMontecatini社から「夢の繊維」と言われた「ポリプロピレン」の製造技術を導入することが決まり、製品のポリプロピレン樹脂の先行輸入が始まって、その関係の業務を担当するためミラノに派遣されたのである。

その業務が一段落した昭和40年8月、私は、ロンドン事務所勤務を命じられ、ミラノからロンドンへ、直接赴任することとなった。住友化学が英国ICI社から、「Acryl Sheet」の製造技術を導入して、「Sheet」の先行輸入が始まり、その業務を担当するために派遣されることになったものである。この2か所の勤務地での駐在は、化学品を担当していたが故のものであり、その後の17年間の海外勤務を方向付けるものとなったと思うのである。

アメリカ科で学んだこと

3期の伊木常昭さんが「私にとって職業は人生そのものであった」と書いておられるが、私も同じ思いが強い。その職業を選択するきっかけとなったのは、アメリカ科に入って、中屋先生に出会ったことであるが、アメリカ科で学んだ2年半の期間に得たものは、他にもいろいろあるように思う。

第1に、「物事を一つの面からではなく、いろいろな面から見る」ということを学んだ。中屋先生の「アメリカ史」の授業の中で、「アサインメント」と称する課題を与えられたがそれは、あるテーマについて、関連した原書を読み、理解し、論評するのであるが、1冊だけではなく、いつも2冊、時には3冊の著書を読み、比較してその差異を分析し自分なりの結論を導き出してレポートするという演習であった。

会社生活において、対外折衝をする場合、相手の立場、考え方を理解し、その上で自分の立場、考え方を相手に理解してもらって、双方で納得のいく結果を導き出すということは極めて重要であった。

第2に「多様性と総合性」ということを学んだ。

アメリカ科に限らず、教養学科の他の地域分科においても、その国の歴史・政治・経済・宗教・文化などあらゆる分野について、深く学ぶことが求められたが、アメリカについてそれを学ぶことによって、世界の国々がそれぞれ独自の国情、背景を持っていることを理解することができた。42年に及ぶ会社生活の中で、イタリア、英国、オランダ、オーストラリアでの駐在経験を含め、数多くの国へ出張する機会があった。オランダ、オーストラリアでは、その国で会社を経営する経験もしたが、それぞれの国情を学び理解して対応することが必要であった。アメリカ科でのアメリカ総合研究の経験は、大いに役に立ったように思う。

第3に、「人との出会い、繋がり大切さ」を学んだ。

アメリカ科では、実に多くの人に出会い、繋がりを得た。同期の仲間は勿論のこと、4期、5期の先輩や、7期、8期の皆さんとの交流があった。授業を離れて、陣馬山、江の島へのハイキングでは、中屋先生、Richard Dorson 先生も一緒だった。発哺の「文芸春秋ヒュッテ」でのスキー合宿、中屋先生自慢の料理「角煮」は美味かった。全員で屋根の雪降ろし、北海道育ちの私が、作業に実力を発揮して喝采を浴びたのも懐かしい思い出である。

諸先生、先輩、後輩との人的交流の基礎資料ともいうべき名簿は、アメリカ科の機関誌「うずしお」に掲載されていた。昨今は、個人情報取扱いが厳しくなり、殆どの会社、機関が

名簿を発行しなくなったが、当時、名簿は人との繋がりを得る貴重な情報源であった。私は、5期生の卒業にあたり、「うずしお」の編集を担当したが、中屋先生は、人との繋がりを非常に重視しておられて、「うずしお」は、「投稿記事がなくても、名簿だけでも発行すべし」と言っておられた。私は、「うずしお」の編集・発行の経験から、住友商事に入社後、住友商事労働組合の機関誌の編集に携わり、後に、住友商事の社内誌「住商こみゅにてい」の編集長を務めることにもなった。

アメリカ科同窓会の設立へ

アメリカ科の卒業生も50期を越えるに至って、先輩・後輩の繋がりを維持することが難しくなっていることを感じるようになった。私は、何とかよきアメリカ科の伝統を守りたいとの一心から、当時、私が世話役として運営してきた「アメリカ科ゴルフ会」のメンバーを中心にして、卒業生の縦の繋がりを恒久的に作ることの検討を始めた。そして2004年5月、「東京大学アメリカ科同窓会」を立ち上げることになったのである。

その後、関係者の尽力により、運営も軌道に乗り、こうして、ホームページに寄稿することになったことは、関係者の一人として喜びを禁じ得ないところである。

最後に、中屋先生との繋がりは、私の職業を決めると共に、更に私の結婚を決める繋がりとなったことに触れなければならないと思う。大阪勤務となって、社内有志による英会話クラスに参加して、そこで、妻と出会うことになったからである。

先生に結婚の通知をしたところ、思いがけず、結婚式に出席するという連絡を頂いたのである。わざわざ大阪まで来てくださるというのは、驚きであり大きな喜びであった。

先生は、昭和40年8月、ヨーロッパに出張の傍ら、ロンドンに住む私共を訪ねてこられた。当時、三井物産ロンドン支店に勤務しておられた4期の丸山秀治さんにも来ていただいて、Wembleyの拙宅で楽しいひと時を共にしたのが思い出される。

中屋先生には、師弟の関係を越えて、ご厚誼いただいたことが非常に有難く懐かしく思われてならない。